

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	現代朝鮮語におけるt#nciとt#nkaについて
Author(s)	深見, 兼孝
Citation	ニダバ, 16 : 19 - 26
Issue Date	1987-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047181">http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047181</a>
Right	
Relation	



# 現代朝鮮語における tinci と tinka について

深 見 兼 孝

はじめに

本小稿は現代朝鮮語における tinci と tinka の用法の分析を基に、両者の意味を定式化するための手がかりを探ろうとしたものである。

## 1 tinci の意味<sup>1</sup>について

### (1) tinci の用法から

次の例文を見られたい。

1 ne ka ka tinci mal tinci neke (<na eke) nin  
 'おまえ' 主 '行く' '行かない' '私' 与 主題  
 sagkwanəpt'a / ne ka alpaka anita.  
 '関係ない' '私' 主 '知ったことではない'

この例文は、聞き手が ka- '行く' ことと mal- '行かない' ことの区別、または違いが、話し手にとって「意に介するようなことではない」ことを表している。つまり、話し手は聞き手が「行っても行かなくても、どちらでもかまわない」のである。続いて次の例文を見られたい。

2 na nin myəɲnyəɲ i neli myən k'ampotia tinci  
 '私' 話題 '命令' 主 '下る' 条 'カンボジア'  
 ap'ikanisit'an itinci ka ket ta.  
 'アフガニスタン' '行く' 意 終

この例文では、話し手は「カンボジア」と「アフガニスタン」の区別をせず、「どちらであって行く」という自己の意志を述べている。さらに次の例文を見られたい。

3 kɪ salam ɪn myəɲnyəɲ man neli myən mikuk itinci  
 '彼' 挿 '命令' 'おまえ' '下る' 条 'アメリカ'

ilpon    itinci    kalk'əsita.  
 '日本'                    '行く(+推+終)'

この例文では、一見「彼」が「アメリカと日本の区別に関係なく行くだらう」という話し手の推量が表されているように見える。しかし、これは3の正確な意味記述とは言えないだろう。というのも、この文で話し手の推量が表されていることには違いないが、「日本」と「アメリカ」の区別は文の主語が表す人物ではなくて、話し手が行なうものだからである<sup>2</sup>。

次の例文を見られたい。

4    ne    ka    pul    k'ɪ    lə    ka    tinci    ne    ka    pul    k'ɪ    lə    ka  
      '私' '主' '火' '消す' '目的' '行く'                    'お前' 主 '火' '消す' 目的 '行く'  
      tinci    pul    in    k'əci    ci    an    nɪnta.  
              '火' 主    '消える' 否                    終

4は、「話し手が火を消しに行っ」ても「聞き手が火を消しに行っ」ても、いずれであっても「火は消えない」という話し手の判断を表している。すなわち、この話し手の判断に対し、「話し手が火を消しに行く」か「聞き手が火を消しに行く」かは影響を与えていないのである。ここで、上の2.3もこれと同じような記述ができるので、まとめて「tinci」を含む文は、それが導く二つの部分の表す内容の区別や違いに左右されない、話し手の判断、推量、意志などを表す」としておこう。例文1や2の「かまわない」というニュアンスもここから出てくるものと思われる。

では、次の例文を見られたい。

5    c'əlsu    tinci    yəŋca    tinci    ka    nta.  
      人名                    人名                    '行く'    終

この文で、「行く」のは① c'əlsu、② c'əlsu と yəŋca、③ yəŋca の3つの場合がある。従って、tinci は単に主語を列挙しているのではない。さらに次の例を見られたい。

6    c'əlsu    tinci    yəŋca    tinci    kɪ    cuŋ    e    han    salam  
      人名                    人名                    'ぞ'    '中' 属    '-つ'    '人'  
      i    ka    nta.  
      主 '行く'    終

6は言うまでもなく「選択」の意味がある。勿論これは kɪ cuŋ e han salam によって与えられているのだが、もし tinci が単に「列挙」の意味しかないのなら、6は成立しないであろう。筆者はむしろ tinci に「選択肢の列挙」という働きがあると見たい。こう見れ

ば、6では二つの選択肢のうち一つが、5では両方が選択されうると考えることができ、両文の適格性が説明できる。

このように考えてくると、*tinci* を含む文は「*tinci* によって列挙された選択肢のいずれにも左右されない話し手の判断、推量、意志などを表わす<sup>3</sup>」と見ることができる。

(2) 類義語 *na* との比較<sup>4</sup>から

次の例を見られたい。

- 7 a    *hri*    *n*    *koyaji*    *tinci*    *kəm*    *in*    *koyaji*    *tinci*    *cyi*  
          ‘白’    冠    ‘猫’                    ‘黒’    冠    ‘猫’                    ‘ぬす’
- lil*    *cam*    *nin*    *koyaji*    *nin*    *co*    *in*    *koyaji*    *ta.*  
          対    ‘揃える’    冠    ‘猫’    主題    ‘よい’    冠    ‘猫’    終
- b    ?*hri*    *n*    *koyaji*    *na*    *kəm*    *in*    *koyaji*    *na*    *cyi*    *lil*  
          *cam*    *nin*    *koyaji*    *nin*    *co*    *in*    *koyaji*    *ta.*

7 a の *tinci* を *na* で置き換えた 7 b は座りが悪い。一方、先の 6 の *tinci* を *na* で置き換えた次の 8 は適格性に変わりはない。なぜだろうか。

- 8    *c'əlsu*    *na*    *yəŋca*    *na*    *kɪ*    *cuŋ*    *e*    *han*    *salam*    *i*    *ka*    *nta.*

6 においても 8 においても、*c'əlsu* と *yəŋca* が選択肢であることには違いがない。ただ、8 の選択肢は 6 のそれと違って「理想のものの代用」<sup>5</sup>である。一方、7 の文脈からは *hri n koyaji* と *kəm in koyaji* を「理想のものの代用」と見ることはできない。むしろ、両者は色について対義関係にあり、選択の両限を示したものと考えられる。7 b が座りが悪いのはこのためであろう。なお、*tinci* が「理想のものの代用」という意味が明らかに表われる文脈で用いられるかどうかについては考察が及んでいない。

2 *tinci* と *tinka* の違い

第一節で挙げた例 1～7 のうち *tinci* を *tinka* と置き換えても文の適格性に変化がないのは 1、4、5、6、7 である。例 2、3 と 7 の違いは *tinci* が結合している二語の意味関係にある。すなわち、2 の *k'ampotia* と *ap'ikanisit'an*、3 の *mikuk* と *ilpon* と違い、7 の *hri n koyaji* と *kəm in koyaji* は色について対義関係にあるのである。*tinka* が導く二つの部分が対義関係にあるかどうかは、その文の適格性に影響を与えているらしい。

次の例を見られたい。

- 9    a    *meŋsu*    *lil*    *manna*    *tinci*    *aŋma*    *lil*    *manna*    *tinci*    *na*    *nin*  
          ‘猛獣’    対    ‘会う’                    ‘悪魔’    対    ‘会う’                    ‘私’    主題

kəki lo ka yaket ta.  
'そこ' 處 '行く' 義 終

b ?məysu lɪl manna tɪnka aɣma lɪl manna tɪnka na nɪn  
kəki lo ka yaket'a

10 a na nɪn məysu lɪl manna tɪnci aɣma lɪl manna tɪnci  
'私' 主題 '猛獣' 対 '会う' '悪魔' 対 '会う'  
hanpən ka po ket ta.  
'一度' '行く' '見る' 意 終

b ?na nɪn məysu lɪl manna tɪnka aɣma lɪl manna tɪnka  
hanpən ka po ket ta.

9、10 のいずれも tɪnka を含む b 文は座りが悪い。ところが、これらの文の məysu を sin '神' で置き換えると、次の例11が示すように、「義務」を表す9の方は座りがよくなる。これに対し、話し手の「意志」を表す10は12のように相変わらず座りが悪い。なお、例は省略するが tɪnci を含む a 文には変動がない。

11 sin ɪl manna tɪnka aɣma lɪl manna tɪnka na nɪn kəki  
lo ka yaket ta.

12 ?na nɪn sin ɪl manna tɪnka aɣma lɪl manna tɪnka hanpən  
ka po ket ta.

məysu と aɣma に対して、sin と aɣma は対義関係にあることに注目されたい。なお、述語が「意に介さない」という意味を表す場合(13)や、「勧誘」を表す場合(14)は、məysu であっても、sin であっても、tɪnci、tɪnka が共に用いられる。

13 a məysu / sin ɪl manna tɪnci aɣma lɪl manna tɪnci ne  
ka alpaka anita.

b məysu / sin ɪl manna tɪnka aɣma lɪl manna tɪnka ne  
ka alpaka anita.

14 a məysu / sin ɪl manna tɪnci aɣma lɪl manna tɪnci  
hanpən ka po ca.  
勧

b meŋsu / sin il manna tinka aŋma lil manna tinka  
hanpən ka po ca.

これとよく似た特徴を示すのが、次の15、16のように、tinci、tinka の一方が否定語 mal- と結合している場合である。15b、16b は先の11、12と平行である。

15 a ne ka c'an nɪn kəs i kəki e it tinci mal  
'私' 主 '彼' 現冠 'も' 主 'そこ' 處 'ある' 否  
tinci na nɪn kəki lo ka yakət ta.  
'私' 主題 'そこ' 處 '行く' 義 終

b ne ka c'an nɪn kəs i kəki e it tinka mal  
tinka na nɪn kəki lo ka yakət ta.

16 a ne ka c'an nɪn kəs i kəki e it tinci mal  
tinci na nɪn kəki lo ka po ket ta.  
意 終

b ?ne ka c'an nɪn kəs i kəki e it tinka mal  
tinka na nɪn kəki lo ka po ket ta.

また、次のように述語が「意に介さない」という意味を表わしている時は、tinci も tinka も用いられる。

17 a ne ka ka tinci mal tinci n ka alpaka anita.  
'おまえ' 主 '行く' '私' 主 'したことはない'

b ne ka ka tinka mal tinka ne ka alpaka anita.

tinci、tinka の一方が mal- と結合していることは、対義関係にある二語と結合していることと通じるところがあるのであろう。

ではなぜ、「意に介さない」ことを表す文や叙法性を表す形態素を述語に持たない文（例えば4や7）が tinci と tinka を入れ替えることができるのに対し、叙法性を表す形態素述語に持つ文のうち、「義務」を表す文は tinci、tinka が対義関係にあるものと結合している時や一方が mal- と結合している時に入れ替えができ、「意志」を表す文ではそれができないのだろうか<sup>6</sup>。思うに、文末の叙法性が高くなればなるほど tinci、tinka が導く部分は条件を表す意味あいが強くなり、それとともに文の一部を成す句や節としての

まとまりが要求されるのではないだろうか。そして、*tinci* が *tinka* よりその力が大きいのではないだろうか。また、*tinka* が対義関係にある部分を導いていたり、一方が *mal-* と結合している時は、そこにある程度のまとまりが与えられるのではないだろうか。もし、この考えが正しく、「意志」が叙法性の最も高いものであるなら、この疑問は解消する。さらに、*tinci*、*tinka* が先の例 5、6 のように主語を導いている場合は、文末の叙法性がいくら高くなっても、その句としてのまとまりは要求されないのではないだろうか。この節の最初に例 5、6 は *tinci* と *tinka* を入れ替えることができると言ったが、次の例のように述語が「義務」(18)や「推量」(19)を表している時も、*tinci*、*tinka* のいずれも用いられる。

18 a c'əlsu tinci yəɟca tinci ka yaha nta.  
 人名 人名 '行く' 義 終

b c'əlsu tinka yəɟca tinka ka yaha nta.

19 a c'əlsu tinci yəɟca tinci ka l k'əs ita.  
 推 終

b c'əlsu tinka yəɟca tinka ka l k'əs ita.

また、次のように *tinci* と違って *tinka* に主格助詞が結合しないのも、それが導く部分が句として十分にまとまっていないからだという説明が成り立たないだろうか。

20 a c'əlsu tinci yəɟca tinci ka ka nta.  
 主 '行く' 終

b \*c'əlsu tinka yəɟca tinka ka ka nta.

おわりに

*tinci*、*tinka* の意味の定式化に向けての難関の一つは、注で示唆したように文末述語の類型化が難しいことである。これを乗り越えるには、類義語の *na*、*kəna* や *kən*、さらに *tin* との徹底した比較が必要であろう。後日機会を得てさらに追及して行きたい。

<付記>

・例文の分析に使った略語は次の通りである。： 主=主格、対=対格、處=處格、与=与格、現冠=現在冠詞形、冠=冠詞形、条=条件形、終=終止形、義=義務、意=意志、

推 = 推量、否 = 否定。

- ・インフォーマントは広島大学留学生の朱斑萬、崔仁泓両君にお願いした。感謝の意を表したい。

- 注 1 参考にした辞典は申&申(1983、第三次修正増補3版)、李(1982、修正増補版)、大阪外国語大学朝鮮語研究室(1986)である。tıncaについては三者とも「tinciを見よ」としているだけである。
- 2 そうすると、話し手は「区別して区別しない」ということになって奇妙に感じられるが、既に崔(1978<sup>7</sup>)に「…区別をしておいて、次にこれを区別しない…」(P.643)という説明が見える。
- 3 「A tinci B」において、A、Bは選択肢として区別されたものであるが、実際の発話において話し手はA、Bの区別をしないことを言うのである。これは注2の崔(1978<sup>7</sup>)の言葉と通じる。
- 4 tinci の類義語として他に kəna、その省略形とされる kən、tinci の省略形とされる tin があるが、今回はこれらとの比較をすることができなかった。
- 5 梁(1973) 参照
- 6 叙法性を表す形態素を持つ述語のうち、いわゆる「推量」を表す例については適当なものが見当たらなかったが、次の例から察するに、対義関係にない語と結合している時は、tinci と tınca は入れ替えができないのであろう。

a ne ka kɪ il il ha tinci poŋki ka kɪ il  
'おまえ' 主 'その' 'こと' 対 'する' 人名 主 'その' 'こと'  
il ha tinci cal an twe ket ta.  
'する' 'うまく行かない' 推 終

b ?ne ka kɪ il il ha tınca poŋki ka kɪ il  
il ha tınca cal an twe ket ta.

また、次の例のように、「意に介さない」という意味の ne ka alpaka anita が述語の時は、同類の neke nin saykwan əp'ta と違って、一方が mal-と結合していなければ tinci と tınca を入れ替えることができないこともある。

c c'əlsu ka mikuk e yuhak il ka tinci ilpon e yuhak  
人名 主 '米国' 處 '留学' 対 '行く' '日本' 處 '留学'  
il ka tinci neke (<na eke) nin saykway əp'ta / ne  
対 '行く' '私' 与 主題 '関係ない' '私'  
ka alpaka anita.  
主 '知ったことではない'



d c'əlsu ka mikuk e yuhak ɪl ka tɪnka ilpon e yuhak  
 ɪl ka tɪnka neke nɪn saɟkwan əpt'a / ?ne ka alpa  
 ka anita.

e c'əlsu ka mikuk e yuhak ɪl ka tɪnci mal tɪnci  
 neke nɪn saɟkwan əpt'a / ne ka alpa ka anita.

f c'əlsu ka mikuk e yuhak ɪl ka tɪnka mal tɪnka  
 neke nɪn saɟkwan əpt'a / ne ka alpa ka anita.

これは alpa ka anita が -l を含んでいるためだろうか。さらに、次の例が非文である  
 ことから察するに、tɪnci、tɪnka を含む文の述語はいかなる判断でも表すことができる  
 というわけではなさそうである。

g \*mikuk e ka tɪnci ilpon e ka tɪnci ton  
 '米国' 處 '行' '日本' 處 '行' '金'  
 i munce ta.  
 主 '問題' 終

h \*mikuk e ka tɪnka ilpon e ka tɪnka ton  
 i munce ta.

#### 参考文献

- 大阪外国語大学朝鮮語研究室編 (1986) 「朝鮮語大辞典」 角川書店  
 崔鉉培 (1978<sup>7</sup>) 「Ulimalpon」 P.643 正音社  
 申琦澈・申溶澈 (1983、第3次修正増補3版) 「Seulimalk'insacən」三省出版社  
 李熙昇 (1982、修正増補版) 「Kukətesacən」民衆書林  
 梁縝錫 (1973) "Semantics of Delimiters." 語學研究 9 - 2 pp.84-121